

交配と繁殖

大泉 真佐子

誰でも、自分の犬がある程度成長すると、自分の犬からはどんな風な子が生まれて来るだろうか、と考えるものです。雌犬を、持っている方は特に、写真や、テレビに写ったラブの子犬のあどけない仕草や、表情など見てしまったら、必ず自分も何時かは、繁殖してみたい、と思う筈です。大半は、こんな単純なきっかけから、ブリダーが誕生するのです。

しかしながら、むやみに繁殖をするのも考えものです。ラブラドルは、世界の先進国で、最もポピュラーな家庭犬の代表犬種として、人気定着し続けていますが、これはきっと、使役犬としての要素も兼ね備えているからなのでしょう。明るく、従順で、温厚な性格と利発さ、服従心と判断力、粗食に絶え、頑強な体に、簡単な手入れ……。使役犬として、ざっとこんな条件が要求されるのですが、ラブラドルは、これらすべての条件を満たしながら、なおかつ、私達の生活の中で、最も自然に深く調和出来る犬なのです。

彼ら独得の魅力と言えば、心理的に、非常に高度な部分があり、私達の気持ちを、いち早く察する能力や、要求に対しての、ずば抜けた理解力には、皆様も驚かされた経験がきっとある事と思います。「愛犬家が、最終的に、行着く犬……。」と言われるのは、この辺から来ているのかもしれませんが。

ペットとしては、充分愛される犬であっても、必ずしも繁殖に適しているかどうかは分かりません。品性が、著しく欠けるもの、又、どんなに性格が良くても、複數欠歯、アンダーショット、片こう丸、先天性股関節脱臼、極端な近親によって出来た犬……etc。この様な、欠点を持っている犬では、まず繁殖は、断念した方が無難です。

さらに、細かく付加えるならば、犬の用途によって、犬作りは、多少違って来るでしょう。ショウドックや、競技会、盲導犬など、それぞれ要求されるポイントがちがうからなのですが、中には、オールマイティーで何でも来いと言う様な、頼もしい犬がいても不思議ではありません。

『繁殖の鍵は、雌犬にあり』と言われてはいますか、その通り、子犬に及

ばす影響力は、圧倒的に、雌犬の方が、強い場合が多く、同じ父犬を持つ場合でも、母犬の犬質により格段の差が出るものです。使役犬の中でも、盲導犬は、私達の、生活に、密着度が最っとも深い上、人の命を左右する重大な任務を課せられています。時として、教えられた事以外に、異なった状況の中で、独自の判断と応用力が必要になるなど、犬の天性が、大いにものを言う場合があるようです。

ブリーダーは、本来の、ラブラドルらしさ、良さ、持ち味を保ち続けることを、決して忘れてはいけません。外観は、スタンダードを基準に、又、誰にでも扱い安い、飼いやすい犬であるよう犬質そのものの向上を意識して、繁殖をして頂きたいものです。

犬が、昔から、安産の神様の様に語り継がれてきたのは、多分多産からくるイメージがあるからなのでしょう。しかし、犬も、人間も、出産は大変、苦しいのは同じです。

まして、日頃から、管理の悪い犬ならばアクシデントも起り安く、子犬を、死に致らしめることもあるかもしれません。 バランスの取れた食事、運動、日光浴の他に、く虫や、ワクチネーションもきちんと済ませてから、交配に臨むべきで、交配相手も同様に管理されているかどうか、調べておく事も大切な事です。週に、一回でも、二回でも、消毒の日を決めて、犬舎や、出入口一帯を、清潔にしておくことも大切な事です。消毒薬は、なるべく、犬の嗅覚をあまり刺激しないものを選びましょう。(オスパン、パコマなど)

早熟な小型犬に比べ、ラブラドルなどの大型犬は、雌は、2～3度目の発情期が来るまで、交配させるのは好ましくありません。雄犬も、1才半を過ぎるまでは、待った方がよいでしょう。

体が、成長に達した雄でも、中には、たまに精神的に、未成熟で、雌に興味を示しても、じゃれるだけで、交配に及ばない犬もいます。こういう場合は、あせらず、自然にまかせましょう。初対面の犬よりも、幼なじみと言ったふうに、精神的に、つながりの深い雌だと案外うまく言ったり、相性もあるらしく、私達が、考えるよりずっと、デリケートなようです。やはり、暖かく見守り、励ましてやる事が、一番の薬のようです。

雌犬の、発情期の出血の量は、比較的第1回目か、一番量も多く、出血期間も長いようですが、中には、排卵はあっても、無出血のこともありますので、日頃の注意が肝心です。

普通出血が始まってから、11～14日目位に排卵があります。初めて交配をさせる雌は、特にリードでつなぐか、人間が手を添えるかして、あばれても押えられるようにしておきます。初めからの自然交配は、危険です。

交配後、約60～63日で出産しますが、ラブラドルは1度に10頭前後の子犬を生みます。

ここで注意をして頂きたい事は、特に、初産の雌の場合、出産を目前に控えた時です。又、出産中は絶対に、目を離さない事です。胎盤も切らずに、生みっぱなしという母犬もまれにいるからです。又、縁の下や、人の手の届かない所や、目の届かない所で生み落としてしまう事もあります。お産には、予期せぬ出来事が付きもの・・・位に万全を期して準備して下さい。

子犬の数が、多いと出産も延長戦になりがちです。従って、胎児の育ち過ぎ、大きさの片寄りを防ぐ為にも、適度な運動や、栄養を与えたり、出産を間近に控えた犬は、大きなお腹で、より動きにくくなりますので、血行促進の為にもブラッシングなどしてあげると良いでしょう。

出産予定日の1～2週間前から、犬舎の中などで、床をガリガリひっかくようになり、出産日に向って、より回数が多くなります。この頃になると、食事や栄養価の高いものを、少量日に数回に分けて与えると良いでしょう。出産の数時間前になると、おちつかず、おりものの量が増え、ほとんどの犬が、食事を取らなくなります。出産時に必要な物は、バスタオル、はさみ、糸など清潔な物を用意します。冬は特にペットヒーターなどで暖を取れるように、夏は体温を発散出来るように、工夫してやります。生まれたばかりの子犬は、適切な温度を保つことが、もっとも大切なことです。子犬の体温は、母犬よりも低く、生後第1週目で35℃そして1週ごとに1℃ずつ上がって、4週で38℃です。目は、生後第2週で開き、4週で正常な視力になり、聴力も4週で正常に機能します。

子犬の数が、多過ぎたり、母乳不足で哺乳するときは、毎日子犬の体重を計り、哺乳漏れを防ぎます。母乳は、完全栄養食で、特に初乳は（産後1～

2日に、分泌される。) 飲ませたいものです。犬の乳は、蛋白質や脂肪など、牛乳や人間の乳に比べて3倍の濃さであり、糖質は、逆に3分の2以下と低く、母犬の産生した、免疫抗体も含まれている。

生後3週間目をむかえるころになると、子犬は、母乳以外の物もほしがるようになり、離乳の時期になります。

次回からは、クエスチョン&アンサー形式にしたいと思いますので、御意見、御質問などありましたら、ドシドシお寄せ下さい。。